

森 彦 著
新體
日本文法教科書

上卷



K220. 82

33

2

文學博士 大槻文彦著

新體日本文法教科書

東京大阪 開成館藏版

新體日本文法教科書上卷目次

第一章	名詞	三
第二章	動詞	三
第一節	動詞の活用の類別	三
第二節	動詞の語形の類別	一三
第三章	形容詞	一九
第一節	形容詞の活用の類別	一九
第二節	形容詞の語形の類別	二二
第四章	助動詞	二四
第一節	助動詞の活用の類別	二四
第二節	助動詞の語形の類別	三五
第三節	助動詞の連續	四〇

目次

明治 37 年 7 月 内交

第一章 名詞
 第二章 動詞
 第二節 動詞の活用分類
 第二節 動詞の語形分類

明治

37 12 7

内交

第五章	副詞……………	五〇
第六章	接續詞……………	五三
第七章	亅爾乎波……………	五四
第八章	感動詞……………	六二
第九章	溫習……………	六四

新體
日本文法教科書 上卷

第一章 名詞

例一。町を離れて、山に近く、學校がある。

大山大將はロシヤの大軍を遼陽に破り、敵將クロバトキンは奉天に走りぬ。

數をあらはす
名詞

この例にて、「町」「山」「學校」「大山大將」「ロシヤ」「大軍」「遼陽」「敵將」「クロバトキン」「奉天」は、物事の名をいふ語なれば、皆、名詞なり。名詞には、ただ數をあらはすのみのものあり。例へば、五つの蕾のうちで、三つは開いたの「五つ」「三つ」の如し。かやうの名詞を、特に數詞といふ。

他の名詞の代
に用ゐる語

例二。わたしはこの本をあそこで買った。
汝はいづこのたれなるか。
この例にて、「わたし」「あそこ」「汝」「いづこ」「たれ」は、名詞の代
に用ゐる語なり。これを**代名詞**といひ、名詞の一種なり。

〔例題〕 一

次の諸例の中に、名詞と代名詞とを求めよ。

- 一。ビール、マッチなどは、清、韓の諸國に輸出される。
- 二。これとそれとは、どちらが善いか。
- 三。僕はここに居たが、君はどこへ行つたか。
- 四。次の日曜日には、兄はロンドンより歸らう。
- 五。讀書のたのしみは、きはまりなし。
- 六。こは美しと、かれはかの畫をわれに示せり。

- 七。わが國民は、忠と孝との二つを忘れず。
- 八。われらは深くこれらの人人の功勞を感謝す。
- 九。政府は第一回の國庫債券金二億圓を募りしに、期
に至りて、その四倍を得たり。

第二章 動詞

第一節 動詞の活用の類別

例。善人は賞を受け、惡人は罰を受ける。

英語を學べども、獨逸語を知らず。

何事も、知る人に學ぶべし。

この例にて、「受け」「受ける」「學べ」「知ら」「知る」「學ぶ」は、いづれも物事
のはたらきをいふ語なれば、皆動詞なり。

動詞の語形の
變化

これらの動詞を見るに、同じ動詞は、「う受け」「うける」「まな
（學）へ」「まなぶ」「し（知）ら」「しる」とやうに、その語の形を種種に變
ず。かやうの變化を、活用といひ、一語の中に、「う」「まな
」「し」の如き、變化せぬ部を、その語根、「け」「ける」「へ」「ぶ」「ら」「る」
の如き、變化する部を、その語尾といふ。

動詞には皆活用ありて、その狀も一樣ならず。また、同じ
動詞も、口語と文語とにて、活用の異なることあり。

一。四段活用。

例 友はゆ（行）かず。 友ゆき、われ留る。

われもゆく。 疾くゆけ。

四段活用の語
形

この例にて、「ゆ（行）く」といふ動詞は、その語尾を「か」「き」「く」
「け」とやうに、五十音圖の同行の阿。段伊。段宇。段衣。段の音に轉

ず。かやうの活用を、四段活用といふ。

四段活用の動詞は、口語にても、その活用の狀、異ならず。

〔例題〕 二

一。次の動詞を活用せしめて、一一、その語形を記せ。
書く。示す。打つ。買ふ。飲む。取る。

二。四段活用の動詞六つを挙げよ。

二。上一段活用。

例 裕をき（著）ず。 裕をきる。

裕をきれば、寒し。 裕をきよ。

この例にて、「き（著）る」といふ動詞は、「き」「きる」「きれ」「きよ」とやう
に、五十音圖の同行の伊。段の音と、これに「る」「れ」「よ」の添ひたる
ものと共に、活用す。かやうの活用を、上一段活用といふ。

上一段活用の
語形

上一段活用の動詞も、文語と口語と、活用の状、異ならず。

〔例題〕 三

- 一。次の動詞を活用せしめて、一、その語形を記せ。
射る。煮る。乾る。見る。居る。
- 二。文語の上一段活用の動詞三つを挙げよ。

三。下一段活用。

例。鞠をけ蹴ず。 鞠をける。

鞠をければ、樂し。 鞠をけよ。

この例にて、「け蹴る」といふ動詞は、「けける」「けれけよ」とやうに、五十音圖の同行の衣段の音と、これに「れ」「よ」の添ひたるものとに、活用す。 かやうの活用を、**下一段活用**といふ。

下一段活用の動詞は、文語にては、右の「蹴る」の一語のみな

下一段活用の
語形

上二段活用の
語形

上二段活用の
動詞の口語

り。この語は、口語にても、また下一段活用をなす。

四。上二段活用。

例。いまだお起きず。 今おく。 おくる人あり。
おくれば、はやし。 はやくおきよ。

この例にて、「お起く」といふ動詞は、その語尾を「き」「く」「くる」「くれ」「きよ」とやうに、五十音圖の同行の伊段と宇段との音と、これらに「る」「れ」「よ」の添ひたるものとに、轉ず。 かやうの活用を、**上二段活用**といふ。

上二段活用の動詞は、口語にては、例へば「おく」「おくる」は共に「おきる」となり、「おくれ」は「おきれ」となりて、全く上一段の活用をなす。

〔例題〕 四

- 一。次の動詞を活用せしめて、一、その語形を記せ。
生く。落つ。延ぶ。恨む。報ゆ。下る。
- 二。前題の六動詞の口語の活用を記せ。
- 三。上二段活用の動詞四つを挙げよ。

五。下二段活用。

例 夜あ(明)けず。 夜あ(く)。

夜のあ(く)ることおそし。 夜あ(く)れば、あかし。

夜はやくあ(け)よ。

この例にて、「あ(明)く」といふ動詞は、その語尾を「け」「く」「くる」「くれ」「けよ」とやうに、五十音圖の同行の字、段と衣、段との音と、これらに「る」「れ」「よ」の添ひたるものと、轉ず。かやうの活用を、**下二段活用**といふ。

下二段活用の語形

下二段活用の動詞の口語

下二段活用の動詞は、口語にては、例へば、「あ(く)」「あ(くる)は共に「あ(ける)」となり、「あ(くれ)は「あ(けれ)」となりて、全く下一段の活用をなす。

〔例題〕 五

- 一。次の動詞を活用せしめて、一、その語形を記せ。
受く。載す。捨つ。尋ぬ。答ふ。改む。覺ゆ。
恐る。植う。得。
- 二。前題の十動詞の口語の活用を記せ。
- 三。下二段活用の動詞六つを挙げよ。

六。加行變格活用。

例 友こ(來)ず。 夏はき、春は去る。 友(く)。
くる 友を待つ。 夏(くれ)ば、暑し。

加行變格活用
の語形

この例にて、「來」といふ動詞は、「く」「來」「くる」「くれ」「こよ」とやうに、加行の三音と、これらに「る」「れ」「よ」の添ひたるものとに、活用す。この活用を、**加行變格活用**といふ。

加行變格活用
の動詞の口語

加行變格活用の動詞は「來」の一語のみなり。この語は、口語にては「く」は、遷りて「くる」となる。

七。 佐行變格活用。

例 争をせ爲す。 争をし、人に忌まる。

無益の争をす。 争をする ことなし。

争をすれば、損あり。 争をせよ。

佐行變格活用
の語形

この例にて、「爲」といふ動詞は「せ」「し」「す」「する」「すれ」「せよ」とやうに、佐行の三音と、これらに「る」「れ」「よ」の添ひたるものとに、

佐行變格活用
の動詞の口語

活用す。この活用を、**佐行變格活用**といふ。

佐行變格活用の動詞は「爲」「御座す」の二語のみなり。この活用は、口語にては、その「す」は、遷りて「する」となる。

「心す」「欲す」「釣す」「發す」「信ず」「攻撃す」などの動詞は「心」「欲」「釣」「發」「信」「攻撃」などいふ名詞の、この佐行變格活用の「す」と合ひて、一語となりたるものにて、その活用の状は「す」に同じ。

〔例題〕 六

次の動詞を活用せしめて、一一、その語形を記せ。

一。 重んず。 二。 與す。 三。 祝す。

四。 論ず。 五。 凱旋す。 六。 すがすがす。

八。 奈行變格活用。

例 敵將なほし死なず。 將しに、卒降る。

奈行變格活用
の語形

敵將 しぬ。 しぬるもの多し。
父 しぬれば、子代る。 潔く しぬ。

この例にて、「しぬ」といふ動詞は、その語尾を「な」に「ぬ」ぬる「ぬれ」「ね」とやうに、奈行の四音と、これに「る」「れ」の添ひたるものとに、轉ず。この活用を、**奈行變格活用**といふ。

奈行變格活用
の動詞の口語

奈行變格活用の動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語のみなり。この活用は、口語にては、「しぬる」は「しぬ」となり、「しぬれ」は「しぬ」となりて、全く四段活用の如し。

九. 良行變格活用。

例. 筆 あ有^らず。 筆 もあ^り、紙 もあ^り。
筆 ある家を求む。 筆 あれば、書く。

良行變格活用

この例にて、「あ有^り」といふ動詞は、その語尾を、「ら」「り」「る」

の語形

「れ」とやうに、良行の四音に轉ず。この活用を、**良行變格活用**といひ、その狀、良行の四段活用に似たれども、

賣^る (四段活用)、 筆 もう^り、紙 もう^る、

有^り (良行變格活用)、 筆 もあ^り、紙 もあ^り、

の如く、相異なるところあり。

良行變格活用の動詞は、「有り」「居り」「侍り」の三語のみなり。

この活用は、口語にては、全く四段活用となる。

筆 もあ^り、紙 もあ^る。

第二節 動詞の語形の類別

以上九類の活用の動詞の語形を、その言ひ態の趣の異同により、類別して、六轉となす。今、九類の活用の動詞を、各一語づつ取り出でて、語形の六轉の表を作れば、次の如し。

良行變格活用
の動詞の口語

動詞の活用表

活用	動詞	語根	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉	第五轉	第六轉
四段活用	ゆく(行) しぬ(死) ある(有)	ゆ し あ	か な ら	き に り	く ぬ る	く ぬ る	け ね れ	け ね れ
上二段活用	きる(著) おきる(起)	— お	き き	き き	きる きる	きる きる	きれ きれ	きよ きよ
下二段活用	ける(蹴) あける(明)	— あ	け け	け け	ける ける	ける ける	けれ けれ	けよ けよ
上二段活用	おく(起) あく(明)	お あ	き け	き け	くる くる	くる くる	くれ くれ	きよ けよ
下二段活用	—	—	—	—	—	—	—	—
加行變格活用	くる(來) —	— —	こ —	き —	くる —	くる —	くれ —	こよ —
佐行變格活用	—	—	—	—	—	—	—	—
奈行變格活用	する(爲) しぬ(死)	— し	せ な	し に	する ぬ	する ぬる	すれ ぬれ	せよ ね
良行變格活用	あり(有)	あ	ら	り	り	る	れ	れ

國語の動詞の變遷

六轉の言ひ態相異なり

國語の動詞の本體

右の表に朱書せるは、口語の活用なり。これによりて、國語の動詞の變遷の狀を察すべし。なほ、口語の第六轉は、
「きい」、「きろ」上二段活用、
「けい」、「けろ」下二段活用、
「こい」(加行變格活用)、
「せい」、「しろ」(佐行變格活用)、
などとなることあり。

前節の諸例に示したるが如く、助動詞の「ず」は第一轉に、名詞は第四轉に、既定の意をなす且爾乎波の「ば」は第五轉に連り、その語を言ひさしおくには第二轉を、言ひ斷るには第三轉を、命令の意をあらはすには第六轉を用ゐる。これによりて、六轉の言ひ態の各相異なる一斑を知るべし。

國語の動詞は、その第三轉を本體とし、すべて五十音圖の字の段の音に終る。但し、良行變格活用の動詞の文語は、伊の段

動詞の活用の
識別

の音に終る。これ、この活用の、四段活用と異なる所以なり。

國語の動詞は、文語にては、四段活用のもの最も多く、下二段活用のもの、これに次ぎ、上二段活用のもの、また、これに次ぐ。今、一つの動詞を見て、それがこれら三活用のいづれに屬するかを知るには、これに「ず」といふ助動詞を連ねて、その第一轉の音を求むべし。阿段なれば四段活用、伊段なれば上二段活用、衣段なれば下二段活用の動詞なること、前の表によりて、明なり。かくて、その何行の、何活用なること定るときは、國語の動詞は、すべて、五十音圖の同行に活用するが故に、前の表に就きて「諸んじおきたる、各活用六轉の韻に和せて、その語形をも直に知ることを得べし。例へば、「おもふ思」は「おもはず」となりて、波行の四段活用なれば、四段活用六轉の

韻「か、き、く、け、け」に和せて、その語尾を「は、ひ、ふ、へ、へ」と知り、また「ふ」は「へ」となりて、波行の下二段活用なれば、下二段活用六轉の韻「け、け、く、くる、くれ、けよ」に和せて、その語形を「へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ」と知るが如し。口語の動詞の活用及び語形も、推して知ることを得。

また、口語と文語とは、相區別して用ゐるを法則とし、口語に文語を交へ、或は文語に口語を交ふるを許さず。

〔例題〕 七

次の諸例の中にて、動詞を求め、その何活用のものなるかを示せ。但し、口語と文語とにて、その活用の異なるときは、共にこれを挙げよ。

- 一。戦闘十六時間にわたりて、激烈をきはむ。
- 二。彈丸の飛びくるさま、雨の降るに似たり。

- 三。倉を開きて、貯へたる米をわかり與へぬ。
 - 四。先んずれば、人を制し、おくるれば、人に制せらる。
 - 五。鐵道が通じて、土地が開けた。
 - 六。規則を設けて、勉強する者を獎勵する。
 - 七。六時が過ぎると、家を出る。
 - 八。時間が盡きたので、答案を出した。
 - 九。蒔かぬ種は、はえぬ。
 - 一〇。浮べる雲は、かへりみず、求めぬ富も、餘あり。
- 次の諸動詞の六轉を記せ。但し、口語と文語との兩様を具へよ。
- 一。聞く。記す。待つ。呼ぶ。積む。歸る。
 - 二。鑄る。率ゐる。落つ。忍ぶ。悔ゆ。得。
 - 三。告ぐ。任す。隔つ。連ぬ。勤む。戯る。

- 一四。御座す。罪す。賞す。勉強す。往ぬ。居り。
- 次の漢字を動詞に訓みて、その口語と文語との六轉を記せ。
- 一五。養。用。恥。強。老。撫。
 - 一六。添。教。堪。絶。覺。飢。

第三章 形容詞

第一節 形容詞の活用の類別

例。氣候がよく、空氣が新しい。

品新しければ、よし。

この例にて、「よく」「新しい」「新しけれ」「よし」はすべて、物事の
有様をいふ語なれば、皆、形容詞なり。

形容詞も、同じ語が「よく」「よし」となり、「新しい」「新しけれ」と

形容詞の語形
の變化

なりて、また活用をなす。

一。久志幾活用。

例 行よ善く、人褒む。 行よし。

よき行をなせ。 行よければ、人褒む。

久志幾活用の語形

この例にて、「よ善し」といふ形容詞は、その語尾を「く」「し」「き」「けれ」とやうに轉ず。かやうの活用を、**久志幾活用**といふ。

久志幾活用の形容詞は、口語にては、その語尾「し」「き」は、共に遷りて「い」となる。

〔例題〕 八

一。次の形容詞を活用せしめて、一一、その語形を記せ。

赤し。 重し。 近し。 長し。 強し。

二。前題の五形容詞の口語の活用の状を記せ。

志久志幾活用の語形

三。久志幾活用の形容詞五つを挙げよ。

二。志久志幾活用。

例 風すず涼しく、月澄む。 風すずし。 すずしき

風吹く。 風すずしければ、暑さ忘らる。

この例にて、「すず涼し」といふ形容詞は、その語尾を「しく」「し」「き」「しけれ」とやうに轉ず。かやうの活用を、**志久志幾活用**といふ。

志久志幾活用の形容詞は、口語にては、その語尾「し」「しき」は、共に遷りて「い」となる。

〔例題〕 九

一。次の形容詞を活用せしめて、一一、その語形を記せ。

新し。 美し。 悲し。 逞し。 煩し。

- 二。前題の五形容詞の口語の活用を記せ。
- 三。志久志志幾活用の形容詞四つを挙げよ。

第二節 形容詞の語形の類別

以上二類の活用の形容詞の語形を、その言ひ態の趣の異同により、類別して、四轉となす。今、二類の形容詞を、各一語づつ取り出でて、その語形の四轉の表を作れば、次の如し。

活 用	形容詞の活用					
	形容詞	語根	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉
久志幾活用	よし善	よ	—	く	し	き
志久志志幾活用	すよし遠	すよし	—	しく	し	しき
					し	けれ
					しけれ	—

右の表に朱書せるは、口語の活用なり。

形容詞は、動詞に比ぶれば、第一轉と第六轉とを闕く。その

形容詞の活用
の表

四轉の言ひ態

相異なり

國語の形容詞
の本體

餘の四轉は、前節の諸例に示したるが如く、その語を言ひさしおくには第二轉を、言ひ斷るには第三轉を用ゐ、名詞は第四轉に、既定の意をなす且爾乎波の「ば」は第五轉に連るなど、言ひ態の趣は、動詞にあると異ならず。第二轉の語尾「く」は「う」に、「しく」は「しう」に、いづれも、音便にて變ずることあり。

國語の形容詞は、その第三轉を本體とし、志久志志幾活用にては、語尾は、その語根の「し」を捨てたるものに附く。

〔例題〕 十

次の諸例の中にて、形容詞を求め、その何活用のものなるかを示せ。

- 一。愼なきものは、油斷多し。
- 二。あしきところを捨て、よきところを取る。
- 三。貴きも、賤きも、遠きも、近きも、來り集る。

- 四。成績善ければ、末たのもしきものに思ひぬ。
 - 五。戦利品甚多く、一一數へがたし。
 - 六。家は貧しけれど、博愛の志は篤し。
 - 七。父母の恩は、山よりも高く、海よりも深い。
 - 八。廣く長い橋を渡って、賑しい町に出た。
- 次の諸形容詞の四轉を記せ。但し、口語と文語との兩様を具へよ。
- 九。熱し。輕し。高し。たやすし。細長し。
 - 一〇。惡し。樂し。惜し。男らし。にぎにぎし。

第四章 助動詞

第一節 助動詞の活用の類別

例 酒も飲まず、烟草も吸はぬ。

功五級に叙せられ、金鷄勳章を授けらる。

敗れたる敵は、北へ逃げたり。

この例にて、すゝめ「られ」らるる「たり」は、それぞれ、「飲ま」「吸は」「叙せ」「授け」「敗れ」「逃げ」といふ動詞に附きて、種種の意を添ふる語なれば、皆助動詞なり。

助動詞は、他の助動詞の下に附くことあり。

講義させられた。まだ開かれぬらしい。

花咲きにけり。出發せしめられたるなり。

また、獨立して動詞の如く、名詞、副詞または亅爾乎波の下に用ゐらるるものもあり。

近衛師團右翼たり。われは中學生徒なり。

兄は卒業せり。理由を明にせり。

助動詞は他の助動詞の下にも附く
獨立に動詞の如く用ゐらるる助動詞

助動詞の語形
の變化

仁、天のごとし。

助動詞も、また、同じ語が「ず」「ぬ」となり、「られ」「らる」となり、「たり」となりて、活用をなす。

一。下二段活用に似たるもの。

例。友は召されず。友は召さる。

友の召さるること、おそし。

召さるれば、出征せむ。早く召されよ。

この例にて、「る」といふ助動詞は、「れ」「るる」「れよ」と活用して、その狀、動詞の下二段活用の如し。これを第一類とす。この語の他に、

友も勳章を授けらる、

明日は行かる、よく覚えらる、

第一類の助動
詞

る

らる

る、らる

す、さす、しむ
つ

花を咲かす、袴を著けさす、書を講ぜしむ、
故郷にて秋を迎へつ、

などの「らる」「る」「す」「さす」「しむ」「つ」も、また下二段活用に似たる活用をなす。

文語の下二段活用の動詞が、口語にては、下一段活用をなすが如く、これらの助動詞も、口語にては、遷りて下一段活用に似たる活用をなす。

友は召される。友も勳章を授けられる。

明日は行かれる。よく覚えられる。

花を咲かせる。袴を著けさせる。

この中にて、「行かれる」「れる」は、動詞の動作をおのれ能く爲すことを得る意にいふに用ゐる助動詞にて、この語は四段

第一類の助動
詞の口語

れる、られる

れる、られる

せる、させる

「れる」の變轉

活用の動詞に連るときは、これと合ひて、約りて、行けるとやうに、一種の下一段活用の動詞を成すことあり。

ここよりは 東京へ行けぬ。 東海道へも行け、

北陸道へも行ける。 京都へ行ける 列車がある。

直に行ければ、よい。

「寫せる」「勝てる」「買へる」「讀める」「取れる」なども、また、これなり。

また、「られる」は佐行變格活用の動詞に連りて、「せられる」となるときは、約りて、されるといふ一種の助動詞を成し、

友も學位を授與される、

よく記憶される、

などとなることあり。その活用の狀は、また下一段活用に似たり。

される

例 「させる」の異

「させる」は、佐行變格活用の動詞を捨てて、直に名詞に付き、或は動詞の如く、獨立にも用ゐらる。

説明 せ させる。 旅をさせる。

「つ」は、口語にては、その「て」といふ語形のみ残りて、且爾乎波の如く用ゐらる。

故郷で秋を迎へて、京に歸る。

二。 奈行變格活用に似たるもの。

例 空晴れなば、行くべし。 空晴れにけり。

空晴れぬ。 快く晴れぬる 空、美し。

空晴れぬれば、暑さ強し。 空よ晴れぬ。

第二類の助動詞ぬ

この例にて、「ぬ」といふ助動詞は、「な」「ぬ」「ぬる」「ぬれ」「ね」と活用して、その狀、動詞の奈行變格活用に似たり。これを第二

類とす。

三。良行變格活用に似たるもの。

例。花咲きたらむ。花咲きたり。

咲きたる花多し。花咲きたれば、観る。

この例にて「たり」といふ助動詞は「たら」「たり」「たる」「たれ」と活用して、その狀、動詞の良行變格活用の如し。これを第三類とす。この語の他に、

常に勝を得るなり、奥大將、司令官たり、

要塞陥落せり、敵兵よく戦へり、

三たび萬歳を唱へけり、

などの「なり」「たり」「せり」「り」「けり」も、また良行變格活用に似たる活用をなす。「行かざりき」「行くべからず」などの「ざり」「べから

第三類の助動詞

たり

なり、たり

せり、り

けり

ざり、べから

た

も、この類の活用に屬する語形なり。

この類の助動詞の中にて「花咲きたり」の「たり」は、動詞の動作の終りたるをいふに用ゐる語にて、口語にては、

花が咲いた、咲いた花が多い、

などの如く、その「たり」「たる」の語形は、遷りて「た」となる。

四。形容詞の活用に似たるもの。

例。山越ゆべく、河渉るべし。勉むべき時は、

今なり。われ讀むべければ、君書け。

この例にて「べし」といふ助動詞は「べく」「べし」「べき」「べけれ」と活用し、その狀、形容詞の活用に似たり。これを第四類とす。

この語の他に、

動かざること、山のごとし、

第四類の助動詞

べし

ごとし

まじ

敵艦隊 出で戦ふ まじ、

まい

などの「ことし」まじも、また形容詞の活用に似たる活用をなす。これらの中にて「まじ」はその「まじ」まじきの兩語形のみ、共に「まい」となりて、口語に存す。

らしい

空が霽れる らしく見える、 空が霽れる らしい、

などいふ口語の「らしい」も、この類に屬す。また、

ない

山が見えなくなる、 山が見えない、

山が見えなければ、雨が降らう、

などいふ口語の助動詞「ない」も、形容詞の久志幾活用の口語の形に活用す。

五。特殊の活用をなすもの。

例一。 かれも知らず、われも知らず。 知らぬこと

は問へ。 知らねば、答へず。

例二。 われは行かむ。 われこそ行かめ。

例三。 花いつ咲きけむ。 昨日こそ咲きけめ。

例四。 月出づらむ。 城今日こそ落つらめ。

例五。 國富みき。 國富みし時代あり。

國富みしかば、兵も強くなりき。

例六。 死ぬとも、退かじ。

例七。 雨やむらし。

第五類の助動詞
ず
むけむ、らむ
き
じ、らし

この例一の「ず」は「ずぬ、ね」と活用し、例二の「む」は「むめ」と、例三の「けむ」は「けむけめ」と、例四の「らむ」は「らむらめ」と活用し、例五の「きは」「しか」と活用す。例六の「じ」、例七の「らし」は、共に他の語形なし。これらの助動詞を、すべて第五類とす。 音便にて、

ん、けん、らん

「む」を「ん」と、「けむ」を「けん」と、「らむ」を「らん」と、書くことあり。

この類の中にて、「ず」は、口語にては、

かれも知らず、われも知らぬ、

などと言ふに、「ぬ」の語形を用ゐ、「む」は口語にては、

われも行かう、机があらう、

などと言ふに、「う」となり、更に遷りて、

直に起きよう、よく考へよう、

などとなる。

〔例題〕 十一

次の諸例の中にて、助動詞を求め、それが何類のものなるかを示せ。

- 一。生徒に錢を持たすることを禁じけり。
- 二。大將たるもの、専ら勇を奮ふべからず。

よ

う

ぬ

三。ふたたび遇はるることあらじと思ひつ。

四。期待せられしとき結果を得しかば、喜べり。

五。休暇になりなば、旅行せむと、今より待たれぬ。

六。少からぬ利を得たれば、平生の願達せり。

七。この兒才あり。師を擇びて、學ばしめらるべし。

八。兄なる人なりけむ。識らねば、語らざりき。

九。勧誘させたが、従はうとも、せぬ。

一〇。出願したれば、許可されないことはあるまい。

二。夕立が来るらしい。濡れないうちに、入れよう。

第二節 助動詞の語形の類別

以上五類の助動詞の各語形の言ひ態を、動詞形容詞にてなしたるが如く、六轉に類別すれば、次の表を得べし。

助動詞の活用
の表

第一類										類 別
なり	たり	ぬ	つ	しむ	さす (おさる)	さす (おさる)	する (おれる)	する (おれる)	する (おれる)	助動詞
なら	たら	な	て	しめ	させ	せ	せ	られ (おれ)	れ	第一轉
なり	たり	に	て	しめ	させ	せ	せ	られ (おれ)	れ	第二轉
なり	たり	ぬ	つ	しむ	さす (おさる) <td>さす (おさる)</td> <td>する (おれる)</td> <td>する (おれる)</td> <td>する (おれる)</td> <td>第三轉</td>	さす (おさる)	する (おれる)	する (おれる)	する (おれる)	第三轉
なる	たる	ぬる	つる	しむる	ささる (おさる)	ささる (おさる)	する (おれる)	する (おれる)	する (おれる)	第四轉
なれ	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ (おされ)	せれ	すれ (おれ)	られ (おれ)	れれ (おれ)	第五轉
―	―	ね	てよ	しめよ	させよ	せよ	―	―	れよ (おれよ)	第六轉

第三類										第四類										第五類																			
たり	せり	り	けり	あり	へかり	へこ	くろこ	まじ	まじ	らし	ない	ぬす	む	けむ	らむ	き	じ	らし		たり	せり	り	けり	あり	へかり	へこ	くろこ	まじ	まじ	らし	ない	ぬす	む	けむ	らむ	き	じ	らし	
たら	せら	ら	けり	あら	へから	へく	くろく	まじ	まじ	なし	なく	ず	む	けむ	らむ	き	じ	なし		たら	せり	り	けり	あら	へから	へく	くろく	まじ	まじ	なし	なく	ず	む	けむ	らむ	き	じ	なし	
たり	せり	り	けり	あり	へかり	へこ	くろこ	まじ	まじ	らし	ない	ぬす	む	けむ	らむ	き	じ	らし		たり	せり	り	けり	あり	へかり	へこ	くろこ	まじ	まじ	らし	ない	ぬす	む	けむ	らむ	き	じ	らし	
たる	せる	る	ける	ある	へかる	へぬ	くろぬ	まじぬ	まじぬ	なし	ない	ぬ	む	けむ	らむ	し	じ	なし		たる	せる	る	ける	ある	へかる	へぬ	くろぬ	まじぬ	まじぬ	なし	ない	ぬ	む	けむ	らむ	し	じ	なし	
たれ	せれ	れ	けれ	あれ	へかれ	へけれ	くろ	まじけれ	まじけれ	なし	なけれ	ね	め	けめ	らめ	しか	じ	なし		たれ	せれ	れ	けれ	あれ	へかれ	へけれ	くろ	まじけれ	まじけれ	なし	なけれ	ね	め	けめ	らめ	しか	じ	なし	
たれ	せれ	れ	けれ	あれ	へかれ	へけれ	くろ	まじけれ	まじけれ	なし	なけれ	ね	め	けめ	らめ	しか	じ	なし		たれ	せれ	れ	けれ	あれ	へかれ	へけれ	くろ	まじけれ	まじけれ	なし	なけれ	ね	め	けめ	らめ	しか	じ	なし	

表中の朱書は、口語の活用を示す。

また、第一類に「る」「らる」の重出したるは、前なるは、例へば、

友は召さる、友も勳章を授けらる、

の如く用ゐる受身の助動詞にて、後なるは、例へば、

明日は行かる、よく覚えらる、

の如く、動詞の動作をおのれ能く爲し得る意にいふに用ゐる助動詞なり。第三類に「たり」の重出したるも、前なるは、

花咲きたり、

など、動詞の動作の終りたる意をいひ、後なるは、

奥大將、司令官たり、

など、名詞の下にのみ附きて、物事を指し定むる意をいふ。

〔例題〕 十二

次の諸例の助動詞を求め、その口語と文語との兩様の語形を悉く記せ。

- 一。芝の とき 草の 生ひ たる のみ にて、木を見ず。
- 二。ここは市中を一目に眺めらるる地なり。
- 三。この畫をかける畫師、わが家に寓居しき。
- 四。三絃をさぐりとりて、弾きて、聞かせぬ。
- 五。よく、ここを考へなば、聖人の教を悟らるべし。
- 六。おのれも行かむとしけれど、果さざりけり。
- 七。敵は強く抗抵せしかど、遂にこれを撃退せり。
- 八。その人今はおはせねど、その徳永く残るらむ。
- 九。買はせようと思ふが、どこにもあるまい。
- 一〇。たづねさせた時には、居らないやうであつた。
- 一一。盛に砲彈を浴びせられたが、少しも退かぬ。

第三節 助動詞の連續

助動詞が動詞及び他の助動詞に連續するには、定りたる法則あり。

一。動詞、助動詞の第一轉を承くるもの。

動詞及び助動詞の第一轉を承くる助動詞

次の助動詞が動詞及び助動詞に附くには、その第一轉を承く。

る。 らる。 る。 らる。 す。
 さす。 しむ。 ず、ざり。 む。 じ。

この中にて、る、らる、る、らる、す、さすが動詞に附くには、相分れて、る、る、すは、四段奈行變格、良行變格の三活用、の動詞に、らる、らる、さすは、その他の諸活用の動詞に附く。助動詞に附くにも、これに準ず。「しむ、ず、む、じ」は、諸活用に通じて附く。

「き」の承け方の異則

また、「き」といふ助動詞の三語形「き」「し」「しか」の中にて、「し」「しか」の二つは、加行變格、佐行變格の二活用の動詞に限りて、その第一轉を承く。

來し人。 來しかば。

進歩せし國民。 進歩せしかば。

口語の助動詞「ない」も、佐行變格活用の動詞を除きては、

雨が降らない、 さうは思はない、

などの如く、動詞、助動詞に附くに、その第一轉を承く。

〔例題〕 十三

次の諸例に就きて、助動詞の連續の誤を正せ。

例一。 われは、犬に追はさせて、友をして射らしめたり。

「追ふ」は四段活用の動詞なれば、「させ」の代に「せ」を用ゐる

べく、しめは上一段活用の動詞「射る」の第一轉「射」を承くべきが故に、「射しめ」と正すべし。

例二。召喚セラレタルされた主人は、行けず、弟に代理セサセさせたり。

文語と口語とは、別ち用ゐるを、法とす。されば、片假名にて正したる左右いづれかに従ひて、改むべし。

- 一。圖書館を開きて、人をして來り觀るを得せしむ。
- 二。かれは、この判決に服さず、直に控訴せり。
- 三。師にておはさるる人より、取締をまかされつ。
- 四。わが國文法を學びむと欲ししこと、久し。
- 五。開國説を主張ししに、反對黨に恨まれて、殺されぬ。
- 六。敵艦は撃沈されたりとの電報、今、公にされたり。

動詞及び助動詞の第二轉を承くる助動詞「て」「たり」「た」の承け方に起る音便

- 七。いかにしてか、多年指導されたる恩に報はむ。
- 八。健康を祝さむとして、送別會が發起された。
- 九。われは、式に參列されたる父の語らるる話を聞く。
- 一〇。先生は、生徒に討論させて、後に講評さる。

二。動詞、助動詞の第二轉を承くるもの。

次の助動詞が動詞、助動詞に附くには、その第二轉を承く。

つ。ぬ。たり。けり。けむ。

この中にて、「つ」の第二轉「て」と、「たり」の各語形と、「たり」「たる」の口語「た」とが、伊、段の音に連るときは、例へば、

書いて（書きて、） 漕いで（漕ぎた、）
 言うて（言ひて、） 買うたれば（買ひたれば、）
 死んで（死にて、） 飲んだ（飲みた、） 飛んだ（飛びた、）
 （い音便、） （う音便、） （鼻音便、）

「ぬ」の承け方の異則

言^レて言^レひて、勝^ッたる(勝^チたる、賣^ッた(賣^リた、(促音便、などとやうに、種類の音便の生ずることあり。また、ぬは、奈行變格活用^ノの動詞には、附かず。

「き」の承け方の異則

「き」も、その三語形「きししか」を通じて、動詞、助動詞の第二轉を承く。されど、加行變格活用、佐行變格活用^ノの動詞に限りて、この三語形は相分れて、「き」は佐行變格活用^ノの動詞の第二轉を、「し」は加行變格活用^ノの動詞の第二轉を承く。

かれはわれに與^ルしき。 萬歲を祝^スしき。

田舎より來^キし友。 友歸り來^キしかば。

「ない」の承け方

口語の「ない」も、佐行變格活用^ノの動詞に附くには、その第二轉を承く。

敵を輕^クんじない。 一日も闕席^スしない。

〔例題〕 十四

次の諸例に就きて、助動詞の連續の誤を正せ。

例 府を開^キひて、仁政を施^セしかば、歸服^スししもの多し。

「開^キひ」は、い音便にて「開^キい」と正すべく、「し」は四段活用^ノの動詞「施^セす」の第二轉「施^シ」を承くべく、「し」は佐行變格活用^ノの動詞「歸服^スす」の第一轉「歸服^セ」を承くべく、共に、しか改むるを要す。

- 一。 わが軍齊しく進むで、敵の陣地を奪^ハひたり。
- 二。 兩艇相竝んで、傾いたままで、漕^ウひだ。
- 三。 命を聞いた人人、準備を整^トめて、跡を追^ウふた。
- 四。 車を待たして、幾度も呼^コんだが、たれも應^コぜない。
- 五。 歸省^スしし弟、書を寄^セせしかば、約^スしし雜誌を送^ルりき。

動詞及び助動詞の第三轉を承くる助動詞

- 六。忠臣、孝子の傳を讀まして、徳性を涵養さした。
 七。友に知して會を催せしに、參集せしもの少し。
 三。動詞、助動詞の第三轉を承くるもの。
 次の助動詞が動詞、助動詞に附くには、その第三轉を承く。
 らむ。 べし。べかり。 まじ。 らし。

「まい」の承け方の異例

但し、これらの助動詞は、良行變格活用の動詞及び良行變格活用に似たる活用をなす助動詞の第三轉をば承けず。
 口語の「まいらしい」も、その承け方、右の諸助動詞に同じ。
 但し、「まい」は、加行變格活用の動詞と口語にて上一段、下一段の活用をなす動詞、助動詞との第一轉、及び佐行變格活用の動詞の第二轉をも承くることあり。
 早く來まい。 外套を著まい。 まだ起きまい。

「らしい」の承け方の異例

動詞及び助動詞の第四轉を承くる助動詞

四段活用の動詞の第五轉を承くる助動詞

報酬を受けまい。 許されまい。
 米價は騰貴しまい。
 「らしい」は、また形容詞の第四轉を承くることあり。
 幅が狭いらしい。 寒さが劇しいらしい。
 四。動詞、助動詞の第四轉を承くるもの。
 次の助動詞が動詞、助動詞に附くには、その第四轉を承く。
 なり。 ことし。
 この他に、前に言へる「らむ」「べし」「べかり」「まじ」「らし」の五助動詞は、良行變格活用の動詞及び良行變格活用に似たる活用をなす助動詞に限りて、その第四轉を承く。
 五。四段活用の動詞の第五轉を承くるもの。
 助動詞「り」は、四段活用の動詞に限りて付き、必ずその第五

轉を承く。

〔例題〕 十五

次の諸例に就きて助動詞の連續の誤を正せ。

例一。決して手を觸れべからずと、嚴しく戒めり。

「べからは下二段活用の動詞「觸る」の第三轉「觸る」を承くべきが故に、「觸るべからず」と正すべく、また、「り」は四段活用の動詞ならぬ「戒む」には附かざれば、他の助動詞を用ゐて「戒めたり」など改むべし。

例二。われらが考ふごとく、た易くは攻め落されまじ。

「ごとく」は下二段活用の動詞「考ふ」の第四轉「考ふる」を承くべく、「まじ」は助動詞「る」の第三轉「る」を承くべきが故に、共に、しか正すべし。

- 一。來ぬことはあるまいが、遅参すらしひ。
- 二。あの人も、長くは逗留すまひ。
- 三。成績は今日にも發表されべき内定なりき。
- 四。敵は、大波の崩るごとき勢にて、押し寄せり。
- 五。新に成れる家屋を購入するべき計畫なるらし。
- 六。生涯忘るるべからざる教訓を受けり。
- 七。少年をして困苦に堪へしむごとき習を養ふべし。
- 八。前と異なるる人人、役員に選舉されしなり。

〔例題〕 十六

次の諸例の誤れるを正して、その由を述べよ。

- 一。あの本を買わふと思ふたが、もはや、用が濟むだ。
- 二。證書授與式につづひて、卒業式をも行はるるべし。

- 三。推薦されたる選手は、頗る來觀者を感じしめたり。
- 四。三日間の糧食を貯ひて、探險旅行を企てり。
- 五。巡視させらるる人は旅費を支給さるることになった。
- 六。焼け失しし家に住せし人は、ここに避難し居れり。
- 七。これがために、罰されやうとは、信じられなひ。
- 八。敵港閉塞隊に加はれむと、血書を出せし勇士あり。

第五章 副詞

例 明に答へられて、楽しく感じた。

肅然と列びて、しばし命を待てり。

この例の「明に」「楽しく」「肅然と」「しばし」は、それぞれ「答へ」「感じ」「列び」「待て」といふ動詞に副ひて、その意を修飾する語なれば、

副詞は形容詞
及び他の副詞
にも副ふ

皆、副詞なり。副詞は、また形容詞及び他の副詞にも副ふ。

金は價最もたかい。極めて厳しき父あり。

いと明に答ふ。誠に楽しく感じた。

「明に」「楽しく」「肅然と」などに、「く」と「に」終る副詞は、動詞「あり」の上に來るときには、これと合ひて、約りて、

明にあり明なり、楽しくあり樂しかり、

肅然とあり肅然たり、

などとなる。かやうにして成りたる「なり」「たり」は、助動詞の「なり」「たり」とは趣異なり。「なり」は、明なる答などとやうに「なる」と轉じて、その下、名詞に連るときには、口語にては、遷りて「明な答」などとやうに、「な」となるを常とす。

靜な山家、
深切な志、
激烈な戰鬪、

副詞に起る音便

なども、この例なり。

「楽しく強くなど」に終る副詞は、う音便にて、楽しく思ふ、意を強うす、

などとなることあり。

〔例題〕 十七

次の諸例に就きて、副詞を求め、その誤れるは、正せ。

- 一。船やや動搖すれども、給仕は巧に茶を運べり。
- 二。終日敵と相對して、頗る激しく砲戦せり。
- 三。常に綽綽たる餘裕ありて、少しも取り亂さず。
- 四。懇篤なる慰問を辱ふし、感謝の念いよいよ深し。
- 五。おひおひ寒ふなったが、身體は丈夫になった。
- 六。わが説には、決して動かぬ、確な根據がある。

第六章 接續詞

接續詞の句を續くる例

文を續くる例

- 七。その頃の學校は、なほ甚不完全なりき。
- 八。次に、先生は、人の人たる道を諄諄と説かれた。

例。花は大きくさうして美しい。

酒を飲み及び烟草を吸ふべからず。

この例にて、さうしては「大きく」と「美しい」との二語を續け、
 「及び」は「酒を飲み」と「烟草を吸ふ」との二句を續くる語なれば、
 共に接續詞なり。

接續詞は、また、一つの文を續くるにも用ゐらる。

風が吹き、また雨が降った。

われは門を叩きぬ、されど、こたへなし。

〔例題〕 十八

次の諸例に就きて、接續詞を求め、その接續せる語句文をも示せ。

- 一。海道筋は、路が平で、且つ廣い。
- 二。詳細は、本社もしくは出張所にて、承るべし。
- 三。この地は、木綿及び陶器を出し、また米を産す。
- 四。暇あれば、擊劍を試み、或は騎馬を習ふ。
- 五。知事竝に滞在中の文部大臣は、臨場された。
- 六。今日も、また訪うた、しかし、まだ歸らぬ。
- 七。公園内に車をひき入るべからず、但し、特に許可を得たるものは、この限にあらず。

第七章 互爾乎波

例 冬になると、田舎では、麥の種を蒔く。

ここよりいづかたへ去りたるかと問へば、われも知らずとばかり答ふ。

この例にて、「と」では「の」を「より」「へ」「か」と「ば」「も」と「ばかり」は、いづれも種種の語に屬して、これと他の語との關係をいふ語なれば、皆、互爾乎波なり。

一。「と」の承け方。

例 忠と孝とは、國體の精華である。

風紀の正しきと規律の立ちたるとは、わが校の私に誇るところなり。

この例に示すが如く、同趣の語句を連ぬる意の互爾乎波「と」は、その語句毎に、幾處にも重ね用ゐるを、法則とす。され

「と」の用例

「や」及び「か」
の用例

ば、これを略して、例へば、

水雷と軍艦の模型を観たり、

など言ふは、殊に非なり。その意のある處に隨ひて、

水雷と軍艦との模型を観たり、

水雷と軍艦の模型とを観たり、

といづれかに、「と」を重ねて用ゐ分くべし。

二。「や」「か」の承け方。

例

知るものありや、なしや。

知るものあるか、なきか。

歌を學びたりや。 歌を學びたるか。

この例の如く、指して疑ふ意の互爾乎波「や」と「か」が、動詞、形容詞、助動詞に附くには、「や」は必ずその第三轉を承け、「か」は

必ずその第四轉を承く。また、例へば、

こは何の書なるか、 價幾許なるか、

などの如く、上に疑辭あるときには、「や」を用ゐず。

三。「ば」の承け方。

例一。 問はば、答へむ。 勉めば、成らむ。

招かれば、行かむ。 知らずば、教へむ。

淺くば、涉らむ。 取るべくば、用ゐよ。

例二。 問へば、答ふ。 勉むれば、成る。

招かるれば、行く。 知らねば、教ふ。

淺ければ、渉る。 取るべければ、用ゐる。

この例一の如く、「ば」は動詞及び動詞に似たる活用の助動詞(第五類をも含む)の第一轉と、形容詞及び形容詞に似たる

未定の「ば」の
用例

既定の「ば」の
用例

活用の助動詞の第二轉とを承くれば、**未定**の意を成し、また、例二の如く、動詞形容詞及び助動詞の第五轉を承くれば、**既定**の意を成す。

これによりて、未定と既定とのいづれに意のあるかを、思ひ定めて、「ば」を用ゐ分くべし。

四。「とも」「ども」の承け方。

例一。問ふとも、答へじ。 勉むとも、成らじ。

招かるとも、行かじ。 知らずとも、よし。

浅くとも、涉らじ。 取るべくとも、用ゐじ。

この例の如く、「とも」は動詞及び動詞に似たる活用の助動詞(第五類をも含む)の第三轉と、形容詞及び形容詞に似たる活用の助動詞の第二轉とを承け、また未定の意を成す。

「とも」の用例

「ど」及び「ども」
の用例

例二。問へど、答へず。 勉むれど、成らず。

招かるれど、行かず。 知らねど、よし。

浅けれど、涉らず。 取るべけれど、用ゐず。

この例の如く、「ど」は動詞形容詞及び助動詞の第五轉を承け、また既定の意を成す。「ども」は、全く「ど」に同じ。

この「とも」「ども」を相混じて、單に「も」とし、

力竭くるも、降らず、 失敗せしも、屈せず、

など、用ゐること多し。されど、既定と未定とを分ちて、

力竭くとも、力竭くれど、 失敗せしかど、

とやうに言ふを、正しとす。

〔例題〕 十九

次の諸例にて、互爾乎波を求めよ。

- 一。町から港へ出るには、どこを通れば、よいか。
 - 二。出席者が三人ばかりで、今日も流會となった。
 - 三。明日は日曜日であるが、それまでには歸らう。
 - 四。疾くより風説はあれど、果して事實なりや。
 - 五。いま荒城のよはの月、變らぬ光、たがためぞ。
 - 六。榮枯盛衰、世の習。その理は知れども、かくまで荒れに荒れむとは、たれかは知らむ、夢にだに。
- 次の語に、各「や」と「か」を附けて、疑ふ意を表せ。
- 七。知る。受け取る。著る。盡く。恐る。
 - 八。愛す。死ぬ。あり。樂し。遲し。
 - 九。許さる。發表せらる。買はしむ。見たり。
 - 一〇。卒業せり。討つべし。來ず。思ひき。

次の語に、各「ば」と「ど」を附けて、既定と未定との意を表せ。

- 二。遊ぶ。見る。落つ。捕ふ。欲す。
- 三。居り。多し。貧し。誘はる。任せらる。
- 三。言はず。捨てさす。得しむ。勝ちたり。大國なり。
- 四。教ふべし。終るまじ。忘れず。記しき。詳なり。

次の諸例に誤あらば、正して、その由を述べよ。

- 一五。汝はその話をたれに聞きしや。
- 一六。この問題は、いかに解すべきや。
- 一七。人、かれに錢を與ふるも、敢へて受けず。
- 一八。遠くあなたを眺めば、富士山霞の間に見ゆ。
- 一九。その方法が採用されるや否やは、明ならず。
- 二〇。友は、少くも現住の家屋と地所を有せり。

- 二。中央軍と右翼軍の前衛は、何が故に出發せずや。
- 三。甲組と乙組の多數が應援せしも、功を奏せず。
- 三。たとひ遠きも、よき水と清き室ある家あるや。
- 四。いかなる難境に陥らむも、決して悔いざるや。

第八章 感動詞

例 やあ勝ったな。 まあ強いね。

ああ、雨や霰と飛び来る彈丸を物ともせず、
突撃せしさまの思はるるかな。

この例にて、やあ、な、まあ、ね、ああ、や、も、かなは、すべて、感動に發する聲なれば、皆、感動詞なり。

感動詞の用例

感動詞には、やあ、まあ、ああ、の如く、獨立に用ゐらるるもの

あり、「な」「ね」「や」「も」「かな」の如く、他の語に屬くものあり。この中にて、「かな」は動詞、形容詞、助動詞の第四轉を承くること、見ゆるかな、善きかな、惑ひぬるかな、などの如し。このとき、形容詞の第四轉は終の「き」を、い音便にて、「善いかな」「楽しいかな」とやうに、「い」に轉ずることあり。

〔例題〕 二十

次の諸例にて、感動詞を求め、その用ゐる方の誤れるは、正せ。

- 一。おお寒い。雪が降って來た。
- 二。さあ撃てと、勇しくも進んだ。
- 三。いでや、人人強者となれや。
- 四。悲しひかな。師今わが校を辭したまふ。
- 五。いざ、友よ奮へかし。われらが前途はなほ遠し。

第九章 溫習

例 わが言もし聽かるれば、必ず重く君を用ゆべし。
 この文には、誤あり。未定の意を成すば、は、助動詞「る」の第一轉「れ」を承くべく、また、助動詞「べし」は上二段活用の動詞「用ゐる」の第三轉「用ゐる」を承くべし。これらを正して、この文を成せる語を類別すれば、次の如し。

わ (名詞(代名詞) 且爾乎波) が (名詞 且爾乎波) 言 (副詞 且爾乎波) もし (動詞(四段活用) 助動詞(第一類) 且爾乎波) 聽 (動詞(四段活用) 助動詞(第一類) 且爾乎波) か (助動詞(第一類) 且爾乎波) れ (助動詞(第一類) 且爾乎波) べし (助動詞(第四類) 且爾乎波)
 必ず (副詞 且爾乎波) 重く (副詞 且爾乎波) 君 (名詞(代名詞) 且爾乎波) を (助動詞(上二段活用) 助動詞(第四類) 且爾乎波) 用ゐる (動詞(上二段活用) 助動詞(第四類) 且爾乎波)

〔例題〕 二十一

次の諸例に誤あらば、正し、さて一つ一つの語に分ちて、その名を示せ。

- 一。世こぞりて譽むとも、必ず察すべし。
- 二。汝重ねて見ば、はやくわれに知せよ。
- 三。常の戯にも、筆執りて、物書くことのみをす。
- 四。おのおの組長に引率されて、整肅に參列した。
- 五。これより寒さのきつふなることは、あるまひ。
- 六。はやく起くるべしと告げしむるも、かれ従わず。
- 七。わが射りし彈丸命中して、敵はその場に仆れり。
- 八。わが軍の勇敢なことには、外國武官も感じてゐる。
- 九。君はかかる珍しき品を、いづこにて得たまへりや。
- 一〇。主人に請うて、わが一見ししも、また同じ日なりき。
- 一一。かうも懇篤な待遇を受けようとは、思はなかつた。
- 一二。生還を期し難きも、命を全ふすれば、再ここに會せむ。

- 一三。兄も弟も召集されたが、親は勇むで、出で立たした。
- 一四。汽船は黒き烟を吐ひて、今抜錨しやうとしてゐる。
- 一五。山常に震動して、地軸今にもくだけむかと、思はる。
- 一六。續篇の發行さるるや否やを問ふ者、千人に及べり。
- 一七。この書と、かれの友の寫せし圖に據るに、その形は、世に傳へらるごときものに異なること、明なり。
- 一八。をりをりに遊ぶ暇はある人の、暇なしとて、書讀まぬかな。

新體
日本文法教科書上卷終

K220,8

乙 227-387

〔日 月 行 發〕

刷 印 日 一 月 二 十 年 七 十 三 治 明
行 發 日 四 月 二 十 年 七 十 三 治 明
錢 五 拾 貳 金 各 卷 下 上 錢 拾 貳 金 卷 首 價 定



發 行 所	發 行 所	發 賣 者	印 發 者 兼	發 著 者
大 阪 開 成 館 電 話 東 局 八 〇 七 番	東 京 開 成 館 電 話 番 町 三 五 五 番 大 阪 市 心 齋 橋 通 北 久 寶 寺 町 角	三 木 佐 助 大 阪 市 北 久 寶 寺 町 四 丁 目 百 六 番 屋 敷	西 野 虎 吉 東 京 市 小 石 川 區 小 日 向 水 道 町 七 十 三 番 地	大 槻 文 彦 東 京 府 北 豐 島 郡 日 暮 里 村 二 百 五 十 八 番 地

(刷印所造製版潘地廣京東社會式株)

